

CONTENTS

エイズ国際協力計画事業 シドニー研修 1-2
 フレンズ+ミーティング 2
 JaNP+ 賛助会員募集のお知らせ 3
 from friends of + エイズの教訓は生かされているのか 4
 from APN+ APN+ 便り 4
 これからの活動予定 4

エイズ国際協力計画推進検討事業 シドニー研修

今年の2月に、財団法人エイズ予防財団の事業の1つとして、オーストラリアにおけるMSM (Men who have sex with men) 対象のエイズ対策に関する現地調査が、日本のMSM対策への還元を目的として実施されました。JaNP+からもメンバーが参加し、合計6名で研修を行いました。



オーストラリアの充実した 予防と支援のプログラム

塩野徳史 (名古屋市立大学 研究員)

この研修では様々な場所を訪れ、多くの人々に出会った。Positive Living CentreやPositive Life NSWはシドニーで陽性者の支援を中心に行われていた。

彼らの最新のテーマは、陽性者同士や陽性ではない周りの人とのコミュニケーションだった。病気のことやセックスのことを暮らしの中で話していくというテーマは、感染者数が増加している日本でも重要だと思う。



ACON (AIDS Council of New South Wales) にあった工夫を凝らしたチラシやパンフレット類。

Positive Life NSWはこのテーマに関する様々な人の声を集めた。そしてより多くの人に当事者の状況やコミュニティの経験を届けるために、声を情報誌として創刊し、創刊のためのクラブイベントを企画しているということだった。この一連の流れがPositive Life NSWのプログラムなのである。これは課題となっていることへの解決策を提示する為ではなく、ゲイコミュニティの中でこのテーマを受容し、一緒に考えていく為のプログラムである。そして、オーストラリアにおけるHIV/AIDSに関わる政策のひとつとして、ゲイコミュニティの人々を始め、HIV/AIDSに関わるあらゆる人がその活動を理解し、サポートしている。



ACONのラウンジ。赤いソファがチャーム。

声を集め、情報誌を創刊し、イベントを実施する。このプログラムは半年という短い間に実施される。そしてゲイコミュニティの人々、研究者、出版関係者、クラブオーガナイザー、行政の人、NGOの人々が関わっている。短期間に多くの人とのかかわりの中で、テーマはゲイコミュニティに還元され、必要な資材が十分手元に行き渡る。これは日本と異なる。

現在オーストラリアは全体で見れば、HIV感染者数は増加している。National Centre in HIV Epidemiology and Clinical Researchによれば、最近の過去8年間で、HIV感染者数は増加の傾向を示しており、1999年に718人だった新規感染者数は2007年には1,051人となっていると報告されている。1987年にHIV/AIDSの感染者数が最高となり、その後さまざまな政策によって一旦低下していた感染者数の推移が、ここにきて上昇に転じた。これには理由がある。

連邦政府エイズ委員会 (AFAO) とのセッションでは次のようなことが話された。シドニーのあるNSW (ニューサウスウェルズ州)、VIC (メルボルンのあるビクトリア州)、ブリスベンのあるQLD (クィーンズランド州) ではその感染者数の傾向は異なる。NSWは横ばい状態であり、他の州では上昇傾向にある。つまりNSW以外の州での感染者数が多くなっている。この相違に関する彼らの考察は、予防を含むHIV/AIDS対策予算が減ったということだった。

VICでは行政機関の方針転換により感染者数が一旦低下し、落ち着いたと見られる時点で対策に関わる予算が削減された。そのためにVICでの予防や支援などは十分に実施できなくなった。一方NSWでは行政機関との協調路線が功を奏し、それまでの予算規模は変わらず、事業自体が縮小されるようなことはなかった。その違いが、現在の感染者数報告の相違となっている。オーストラリアではゲイコミュニティ、研究者、行政、NGO、陽性者が協働し、常に状況を考察しHIV/AIDS対策を検討している。これも日本とは異なる。



Positive Living Centreの看板。00年にはすでにあったことがわかります。

(2面へ続く)

日本の予防や支援プログラムは、オーストラリアと比べてデザインも目的も手法も劣ることはなく実施されているが、ニーズのあるところと十分行き渡るには基盤が脆弱であるといえる。オーストラリアではHIV/AIDSに関わる人数は日本に比べはるかに多い。また彼らの職種も様々である。そしてオーストラリアのHIV/AIDSに関する政策は、ゲイコミュニティ、研究者、行政、NGO、陽性者との協働の中で戦略として生まれ、有給のスタッフによって実施されている。さらに社会やゲイコミュニティはその活動を支えている。

もちろんオーストラリアのような構図が一朝一夕にできるとは思わないが、日本では不可能であるとも思わない。日本には、少ないけれどHIV/AIDSに関わる活動をしている人がいて、ゲイコミュニティをベースとして活動している組織や陽性者を支援している団体がある。わたしたちは小さいながらも、その構図に必要な要素を、もう持っている。

**平成20年度エイズ国際協力計画推進検討事業
オーストラリアのMSMコミュニティでの
エイズ対策に関する現地調査**

[期間] 平成21年2月23日～2月27日

[参加者] 岩橋恒太、塩野徳史、辻宏幸、高久陽介、ジェーン・コナー、沢崎康

[訪問先]

1. ACON (AIDS Council of New South Wales)
MSM、女性、トランスジェンダーの人々のHIV/AIDS問題に取り組むNGO。
2. AFAO (Australian Federation of AIDS Organizations)
オーストラリア各州で活動するエイズコミュニティ関連機関の連合本部。
3. Albion Street Centre
ニューサウスウェルズ州が運営するHIV専門の外来専用病院。60人以上のスタッフが、日々の外来診療、カウンセリング、研究、予防教育活動に取り組む。
4. National Centre in HIV Epidemiology and Clinical Research
国立HIV疫学・臨床研究センター。
5. Positive Life NSW
HIV陽性者のための団体で、HIVに対する差別偏見の除去、陽性者の孤立防止などに取り組む。
6. Positive Living Centre
HIV陽性者のためのセンター。食事提供やマッサージ、栄養相談や無料セラピーなどを提供。
7. SWOP (Sex Workers Outreach Project)
性産業に従事する人への健康情報の提供と直接的支援などを行うプロジェクト。
8. 357 (Sydney City Steam)
シドニー市街の中心にある男性専用のサウナ。

*詳細な調査報告書は同財団より発行されています。

HIV陽性者のパートナー、家族、友人のための「フレンズ+ミーティング」

Friends +
Meeting

パートナーが、家族が、友だちがHIV陽性だった。こんな時、私たちは親しい人をどう支えていったらよいのだろうか？ 自分の気持ちをどう整理したらよいのだろうか？——08年に試行プログラムとしてスタートしたHIV陽性者のパートナー、家族、友人の会「フレンズ+ミーティング」は、東京都内にて全4回・1クールを無事終了しました。参加者は最近パートナーからHIV陽性であることを告げられた人から、長くエイズ問題に関わってきた人まで様々で、毎回10名以上の参加がありました。

●第1回(2008年4月)

「HIV陽性者とともに暮らす～親近者としてできること～」

前半は、HIV陽性告知を受けた人が直面する問題や、その親近者の対応について、特定非営利活動法人ぶれいす東京の生島嗣さんのお話をうかがいました。後半は、HIVやHIV陽性者との関わりについて参加者全員でなごやかに話し合いました。

●第2回(2008年7月)

「HIV感染症治療の現在～医師の視点・患者の視点～」

現在HIV診療を行うクリニックを開業されている根岸昌功さんから、HIVの治療についてお話いただきました。その後、HIV陽性者の治療と生活について参加者で話し合い、「慢性疾患」と言われて久しいHIVの治療について、あらためて考える機会となりました。

●第3回(2009年1月)

「HIV陽性者とセックス～セックスについて話そう～」

HIVとともに生きる人々が、もっと安心して性生活を続けるために、セックスに対する意識や、問題の克服、失敗談などについて、参加者同士でぎゅぎゅんな話し合いが行われました。

●第4回(2009年4月)

「身近な人のHIV感染を知って～体験を分かち合おう～」

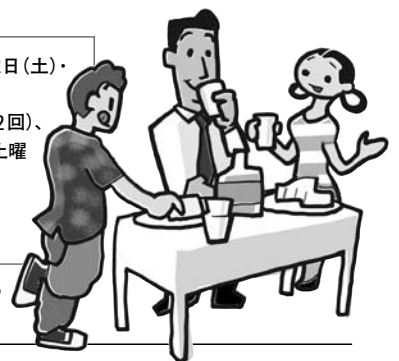
過去3回を振り返りつつ、それぞれの体験や1年間での変化について確かめ合いました。他の参加者の立場に共感したり、一人ひとりの経験にかけがえの無い価値を認めてゆくセッションとなりました。

今後のフレンズ+ミーティング開催予定

前年度同様に4回1クールのプログラムにより、以下のスケジュールで開催いたします。特に、今年は東京以外でも大阪、名古屋で実施しますので、興味のある方は是非ご参加ください。(詳細はWEBサイトをご参照ください)

- 【東京】** 第1クールは09年8月22日(土)・8月29日(土)、
第2クールは11月(土曜2回)、
第3クールは10年2月(土曜2回)に開催
【大阪】 09年10月(土・日)開催
【名古屋】 10年1月(土・日)開催

illustration: しらいしろう



JaNP+ 賛助会員募集のお知らせ 活動へのご支援をお願いします

Supporting

■ JaNP+ 設立7周年

このたび JaNP+ は設立満7周年を迎えました。これもみなさんのご支援とご協力のおかげと感謝しております。

設立当時、HIV 陽性者を取り巻く状況はなかなか厳しく、厚生労働省の報告でその数が増加していることを知ることはできても目に見える存在にはなりにくく、同じ立場の当事者同士が出会うことさえ困難でした。そこで JaNP+ はこの状況を変えるために HIV 陽性者がつながって社会に働きかけていこうと考え、数名の有志によって設立されました。

現在では HIV 陽性者スピーカーの育成、派遣、全国 HIV 陽性者交流会の開催、国内外の HIV 陽性者団体とのネットワーク等、複数のプロジェクトを実施しています。また、長期療養シリーズや日本エイズ学会 HIV 陽性者参加支援スカラシップのように他団体との共催事業も定着してきました。

少しずつではありますが HIV 陽性者が同じ立場の人と出会ったり、医療や地域における支援サービスなどの社会資源にアクセスする機会は増えてきていると感じています。

■ 小さな力を大きくつなぐために

しかし、私たちの活動は小さく社会に対しても急激な変化をたらすほどの力を持っていません。そのいっぽうで一般社会における HIV / エイズに対するイメージはこの疾病が日本に登場した80年代半ばと大きく変わっていません。また首都圏、近畿圏などの一部を除けば地域社会における支援体制には課題も多く、ネットワークを広げる必要性はむしろ

本格化してきたとも言えます。

そこでわたしたち JaNP+ ではこれまでの活動を地方に展開し広げていしつつ、昨年度より活動を開始したフレンズ+ (HIV 陽性者のパートナー、家族、友人の会) で HIV 陽性者周辺の人々の支援を行います。また、職域における啓発プログラム、HIV 陽性者のセクシュアルヘルス支援のプログラム等、新しいプロジェクトも始動します。

その中で最も大きな課題は JaNP+ の活動にもっと多くの人に参加していただき、小さな力を大きくつないでいくことです。そして、この活動を継続するうえで寄付収入、助成金収入、事業収入のバランスをとり経済的基盤を安定させる必要もあります。

■ 賛助会員として JaNP+ にご参加ください

そこで、JaNP+ ではこのたび活動に参加していただける賛助会員を HIV 陽性者であるか否かにかかわらず、広く募ることとしました。詳しくは JaNP+ のホームページをご覧ください。また、インターネットからのアクセスができない方は事務局までご一報いただければ、郵送またはファックスで資料をお送りさせていただきます。

みなさまのご理解とご協力をお願いします。

◎入会申込書は以下のページからダウンロードできます。

<http://www.janplus.jp/supporting/>

JaNP+ 事務局：東京都新宿区内藤町 1-7 ホヲクビル 402

FAX: 03-5367-8559 電話: 03-5367-8558

設立7周年を迎えて これからの JaNP+

JaNP+ 代表 長谷川博史

7年の活動を振り返って、達成できたこともあります。私たちが暮らしている社会はまだまだ「HIV 陽性者があたりまえに生活できる社会」には程遠い状況だと認識しています。私たち一人ひとりの力は小さなものです。しかし、私たちは一人ではありません。理解し応援してくれている人たちもたくさんいます。小さな力の個人が大きくなることで社会を変えていく力が生まれます。

昨年、JaNP+ は部門制から個々の事業を独立させたプロジェクト制に組織を変更しました。「HIV 陽性者があたりまえに生活できる社会をめざす」という JaNP+ の使命を実現するために行うべきことはあまりにも多く、小さな任意団体の JaNP+ で出来ることは限られています。そこで、それぞれの事業をプロジェクトとしてこれを事務局がサポートするという形で機動力のある組織づくりをめざしたものでした。

おかげさまでニュースレターの定期刊行化、

Webの充実など長年の課題だった広報体制も整ってきました。そして昨年は各プロジェクト活動の活性化や新しいプロジェクトの始動などその成果が表れた1年だったと思います。

私たちのような当事者の活動は時として一定の体制が整うと閉鎖的になることがあります。また、当事者であるがゆえに自らの活動を冷静に見る客観性を欠く恐れもあります。そこで、8年目を迎えた JaNP+ はこれまで以上に多くの HIV 陽性者やその周辺の人たちとつながり、さまざまな活動を着実に継続してい

こうと考えています。そのためにはさらにいくつかの課題をクリアする必要があります。

そのひとつとして、アドバイザー制の導入を考えています。JaNP+ ではこれまで非公式に活動に関連した専門家や有識者、さらには連携可能な他団体の経験者のみなさんに個別に助言をお願いしてきました。今後、全国の他団体や医療、保健、行政といった公的機関との協働・連携もますます必要となってきます。そこで今年度からは定例会議を開催するなどして皆さんに JaNP+ の活動、運営面に関して、これまで以上に助言、指導を積極的にお願いする予定です。さらに幅広い領域からアドバイザーをお願いし各プロジェクトの活動に反映させていきたいと考えています。

このように JaNP+ は組織面、運営面の適正化、合理化を進めながら現在 NPO 法人化の準備を進めています。今後ともみなさまのご協力とご参加をお願いいたします。

a voice
from
friends
of +

Column

産経新聞編集委員 宮田一雄

生かされているのか
エイズの教訓は
新型インフルエンザ

謎の新型肺炎と呼ばれた重症急性呼吸器症候群(SARS)が2003年の春から夏にかけて流行した際、「SARSエイズの教訓は生かされているのか」と題したフォーラムを企画したことがある。少なくとも報道に関していえば、あまり教訓が生かされてはいないように思えたからだ。

SARSとエイズの共通点と相違点をまとめたその時の資料を紹介しよう。共通していると考えたのは、(1)どちらもウイルス感染症(2)ナゾの病気として登場(3)比較的、早期に病原体を発見(4)日本では病気の流行の前に情報の流行が先行(5)恐怖と不安に基づいた対応一などだった。

一方の相違点は、SARSが呼吸器系の疾患で、病原ウイルスの感染経路が主に飛沫、接触感染なのに対し、エイズの病原体であるHIVの感染経路は性感染、血液感染であること。SARSから回復した人の体内にはおそらくウイルスは残らないが、HIVに感染した人は生涯にわたりHIVを抱えて生きていくと考えられていることなどがあげられる。

改めて読み直すと、SARSではなく、最近の新型インフルエンザについて書いているような錯覚にも陥る。6年前のSARS報道は、先行するエイズ報道に学ばず、さらに今回の新型インフルエンザの流行では、そのSARSの苦い経験からも学ばなかった。この春以降の新型インフルエンザ報道が、せつせ

と恐怖と不安を増幅させながら、取ってつけたように「冷静な対応を」などと書き添える類のものだったとしたら、そう考えなければならぬ。

そうではないと思いたいが、仮にそうだとしたら非常に残念である。どうしてそうなるのかということも今後のために考えておく必要がある。

あくまで仮定の話ではあるが、もしかしたら、感染症対策の考え方の根本に感染した人、病気と闘っている人に対する想像力が欠けているせいなのではないか。たとえば、「水際作戦で国内への病原体の侵入を防ぐ」といった記述が散見され、そう書くことにあまり疑問を感じなかった記者が仮に(あくまで仮に、の話です)いるのだとしたら、メディアの病状はちょっと深刻だ。

感染症対策は、患者が安心して医療を受けられる社会的環境を整えることが基本でなければならない。これはエイズ取材でも常々、指摘されてきたところである。新型インフルエンザの流行初期の水際作戦にしたって、その目的は排除ではなく、治療の提供であったはずだ。「エイズと新型インフルエンザは違うよ」というご批判も承知の上で、この点はあえて強調しておきたい。

APN+ 便利 from APN+

6月12日から15日まで、タイのバンコクで開催されたAPN+ (アジア太平洋HIV陽性者ネットワーク)のミーティングに参加した。

APN+はアジア・太平洋地域にある約30の国から代表者が参加しているHIV陽性者のネットワークだが、中央アジアから赤道直下の島国まで実に広範なエリアをカバーしている点に特徴がある。組織は大別して「MSM (Men who have sex with men)」「WAPN (女性HIV陽性者)」「IDU (薬物常習者)」という3つのワーキンググループと、それらを統括する「運営委員会」から構成されている。

APN+では、アジア・太平洋地域に住む陽性者の行動の可能性を広げ「現在の自分たちにできることを考えよう」という5カ年計画を2006年から展開してきたが、4年目に当たる今回もHIV陽性者のCapacity Building (能力

開発)の問題を取り上げ、情報共有化を効率よく行っていくために必要なネットワーク能力の強化に焦点を当てた。

「MSM」のミーティングでは、男性間でのセクシャルヘルスの問題をPositive health, dignity and prevention (HIV陽性者が自分の健康や尊厳、感染予防の必要性を前向きに考えること)の視点から討議した。またAPN+の総会である「AGM」でも、活動報告や監査報告などの通例の議事のみならず、コミュニケーションスキルや陽性者自身のエンパワーメントについての話題が取り上げられた。

8月上旬にはインドネシアのバリ島でICAAP (アジア太平洋地域国際エイズ会議)が開催され、今回のAPN+ミーティングの内容を反映させた形でPLHIVやMSMのサテライトシンポジウムやセッション、イベント等が併催される予定である。HIV陽性者が「自分たちの力によって」積極的に社会に関与し、「自分たちの力をより高めていく」ための取り組みが、ここでも始まっている。



アジア・太平洋地域の各国から集まったメンバー達。出身は違っても、目指す地点は同じです

活動報告 & 今後の予定 | Agenda

- 6月28日(日) 2008年度ジャンププラス活動報告会を開催
- 7月1日(水) 第23回日本エイズ学会学術集会・HIV陽性者参加支援スカラシップの受付を開始。詳しくは<http://www.ptokyo.com/scholarship2009.html>
- 8月22日(土)・8月29日(土) フレンズ+ミーティング@東京を開催
- 10月 フレンズ+ミーティング@大阪を開催予定
- 11月 日本エイズ学会期間中に全国陽性者交流会を開催予定

編集後記 from editors

●毎年、夏は伊豆大島です。一日中、魚を追いかけて…水難事故よりシミが怖いかも。シミには美白で断固として立ち向かいます。(高久)

●もっともっとリッチなコンテンツにしたい! フルカラーにしたい! そのためには予算が…。お金の話ばかりするのは止めておきましょう。(神谷)

●梅雨も終わり漸く夏! なんですが、汗っかきな自分には外は地獄だし、冷房の効きすぎた室内もまた地獄。早く秋にならんかな。(加納)

JaNP+ News Letter | No.7

編集/高久陽介・神谷浩樹・長谷川博史
編集発行/日本HIV陽性者ネットワーク・ジャンププラス
〒160-0014 東京都新宿区内藤町1-7 ホトクビル402
[TEL]03-5367-8558 [FAX]03-5367-8559
[E-mail] info@janplusplus.jp
[ホームページ] <http://janplusplus.jp/>
イラスト/しらいしろう
デザイン/加納啓善 印刷/株式会社テンプリント